三河アララギ

平成二十九年

新　年　号

第六十四巻　第一号

ニューヨーク日記（123）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

Wrapping time

Blue Shoe Diaries

サンクスギビングが終わるとクリスマスモードに突入。クリスマスプレゼントを買って、包んで、クリスマスまでに送る／渡す。それで年末だから色々なパーティーやディナーで結構忙しくって皆結構ストレス溜まる時期。私は殆どネットでショッピング。そのままネットからプレゼント送っても良いんだけどこっちの雑なプレゼントの包み方が気に入らない。だから家で包み直してそれから送る。今回おもちゃをNYTーシャツで包んだらかわいいく出来た!

The end of thanksgiving means the begining of Christmas season. Christmas present shopping, gift wrapping, gift mailing. And since it's the end of the year, there are lots of parties and dinners to go to. So it's a bit hectic and ultimately stressful because you have to get everything done and delivered by X'mas. I do most of my shopping online so I can send the gifts directly from there but I just don't like the blah gift-wrapping. So I do it myself, then mail it out. This year, my favorite was this toy (a Furby!) wrapped in an 'I ♡NY' tee. Cute, no?

目次

第六十四巻第一号（通巻七五七号）

表紙・仙厓禅画模写　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記(123)　Blue Shoe（2）
黄素馨の門　御津　磯夫（4）
歌集「はゝきくさ」Ⅲ　大須賀寿恵（5）
歌集「草々」　今泉　米子（6）
歌集「はゝきくさ」Ⅰ　河原　静誠（7）
黄葉（もみじ）して　岡本八千代（8）
砂漠の塩　今泉　由利（9）
同世代　弓谷　久子（10）
零余子　内藤　志げ（11）
身辺雑歌　林　伊佐子（12）
縁側　安藤　和代（13）
落ち着かぬ　伊藤　忠男（14）
茗荷　清澤　範子（15）
スーパームーン　鈴木　孝雄（16）
富士山　森岡　陽子（17）
平和　阿部　淑子（18）
前進　足立　晴代（19）
佐脇浜　白井　信昭（20）
五条川　杉浦恵美子（21）
柊の花　山口千恵子（22）
三輪山(3)　登拝　夏目　勝弘（23）
大豆　鮫島　満（24）
歌集「夢のつづき」　水上　信子（25）
『ことよせ』　いーはとぶ　稲吉　友江（26）
鈴木美耶子（26）
吉見　幸子（26）
牧原　正枝（26）
石田　文子（26）
森　厚子（27）
山崎　俊子（27）
三田美奈子（27）
水野　絹子（27）
牧原　規惠（27）
現代学生百人一首　東洋大学
斉藤　美奈（28）
藤波ほのか（28）
高木　蔵治（28）
大場　歩（28）
小田切　拓（29）
鈴木　惇也（29）
長崎優希音（29）
神庭　芳史（29）
白井　信昭（30）
森岡　陽子（30）
私の一首
高橋　育郎（31）
童謡・ゆきのうさぎ
『俳句』
山元　正規（32）
山迫　京子（32）
森岡　陽子（32）
田中　清秀（33）
重野　善恵（33）
今泉　由利（33）
松本　周二（34）
米田　文彦（34）
柳田　皓一（34）
植村　公女（35）
田中　清秀（36）
丸山酔宵子（38）
米田　文彦（40）
かさね吟行会
『酔いの徒然』(57)
本からのあれこれ(14)
ある自然科学者の手記(56)
大橋　望彦（42）
今泉　雅勝（44）
短歌に詠まれた茂吉　六十四回
鮫島　満（46）
絹の話(74)
楽しい時間(50)
山本紀久雄（48）
漢詩研修
平井　茂行（50）
三輪山(3)　登拝
夏目　勝弘（54）
「氷魚」のことから(192)
岡本八千代（55）
ことのはスケッチ(456)
今泉　由利（56）
編集室だより（二〇一六年十一月）
三河アララギ（58）
お知らせ・「三河アララギ」について
鈴木　孝雄（59）
（60）

黄素馨の門（昭和四十一年～昭和四十四年）　御津磯夫

けふのごとふりくる雨に佐野の沖船くるしめて人はゆきけむ
はるかなるこの水上を十津川とにごりもひろき川口わたる
否定には七たびふみて見たまひきわがとほりすぐる雨の三輪が崎
昨夜食ひし海のさざえの小さき殻二つ包みて網棚にあり
光ささぬあしびの蕾かたくしてあやふきわが日あひかさねゆく
愚にて狭き一生にうれしくも読み崩したる本のいく冊
稗子のごとくこころの躍りつつ辞書ふたつまた新らしく置く
古を知りて語りてつきざるにくろがねもちの遠き昏き樹
いく百の文献学者いひ張るとも三河の御津に野あり埼あり
命果てしひとの行方の思ほゆるHelp細胞の生きゐることも

歌集「はゝきくさ」Ⅲ

大須賀寿恵

子の縁談断る言葉さがしをり潦（にわたづみ）は飛石のめぐりに流る

膝がしら抜けはじめたるパジャマ着て今宵は眠らむアンカ抱きつつ

与えられし休みは体いたはらむ未だ明るきに床にもぐりぬ

痛む筈なしと云はれしその刻より左の奥歯いたまずなりぬ

ふくらみし葱立ち並ぶ畝の中一株黄色き赤蕪の花

年々に葉の細り来て垣の内の水仙はいつよりか花もたずなりぬ

わが好む屋敷畑の白菜はつぼみもちたるままに鋤き返さる

辛子色の絨毯は君より賜ひたるこの人畳に起き臥しをする

安からぬ心を持ちて百草にいたみ止め入れ飲みくだしたり

行平のふた持ち上げてふきこぼるる匂ひ香ばし兄の粥焚く

歌集「草々」

今泉米子

紫の風呂敷買ひに出でて来つ桦黄葉の雨に散る道

枯れ伏しし草庭に今朝の霜白し枯れたるものにまづ霜の置く

スペイン語の航空便はセリーナより机におきて一字も読めず

しどろなる枯草の中に蹊（みち）はあり野良犬猫の通ひくる庭

株立ちて活々と青き曼珠沙華楓落葉の散りたまりつつ

わが翁朝々剪りて飽かなくに花年（はなどし）と咲く水仙の花

小寒に入りたる夜を香にたちてわが家の小さき水仙の風呂

立春の朝の小雨の降りそそぎ濡れてたつかなぎぼうしゅの花殻

くれなゐと白とがありてふた本の馬酔木の蕾雫する雨

あたりまへのことと思へど竹藪の中の梅の咲きはじめたり

歌集「はゝきくさ」I

河原静誠

ギニヨルもマリオネットも焼け失せぬ今は童話に励まむとする

浄願寺の御堂に満つる園児の声壇上の仏よいつくしみませ

園児等と別れてここに百余日ギプスベッドにわれは臥しをり

病室の窓流れゆく雲ひとつ夕日かがやく弥陀の浄土よ

幼児劇試みし今日第一番に発言せしは常にものいはぬ児

焼跡に再建の木槌うち振りて地祭りをせり五月雨の中

夜の更けて眠れぬままに床に坐り父母恩重経をくりかへし読む

園児等の午睡の笑顔みまもりて今日の保育の半すぎたる

腸管の切除をうけて百余日園児とたわむるに今またうづく

一時三十分の脳波検査を待つ吾は秒針の動きに眼はなたず

黄葉（もみぢ）して

蒲郡　岡本八千代

いただきし志賀山寺萩黄葉（もみぢ）して今年もそよげりその黄金色（こがね）

君とわれ共に卒寿となりしとふ庭萩今年も黄葉してそよぐ

生ある者われらとメダカの一匹だけこの家と庭にて今日も暮れつつ

時々は庭の水甕のぞきにゆく命を保つ一つのメダカに

水甕に冬の来たりて淋しかろ淡きオレンジのメダカよメダカ

すがすがしき今朝（け）の電話のわが声よ漱石の本また二冊注文す

遠き友近き友とも音沙汰なく秋の一日（ひとひ）が夕暮れてゆく

報恩講の御引上（ごいんじょう）とて来たまへる坊様はかつてのわれの教え子

坊様に従ひて読む正信偈（しょうしんげ）夫と並びて読みゐる有情

われひとり黄昏の庭に佇ずめば声かけてくれる友あり愉（たの）し

砂漠の塩

東京　今泉由利

厚き雲覆ひて去らぬ妙高山映像に見るその山頂を
富士山と湧水池と山女魚との景色の中に私もゐて
白雲と白雪いだく富士山とやふやく見分く白雪の艶
ゆったりと座しゐるままにぐいぐいと天下の険を登りゆきゆく
天下の険千仞の谷もものとせず会ひにゆきます「孔雀鳳凰図」
空を歩くそんな気のして吊り橋は長く長く富士山に添ふ
実りしは箱根の山のどの辺り百粒ほどのむかご携ふ
少々の砂漠の塩にゆであげぬひと粒ひと粒むかごひと粒
避雷針保護柵めぐらす注連縄の神杉よりのフィトンチッド
午後となる淡き光りを集めつつ白輝やきぬ八ッ手の花の

同世代

豊川　弓谷久子

朝の話題となりたる本が早々に我の手もとにある嬉しさよ
直木賞受賞作より四十余年変らぬ歯切れよき作家なり
同世代なれば分りぬ作家の心うべないながら読み耽けりたり
眠るが如く息引きとりしと伝え聞く遠きえにしの人の最期を
草道に穂芒四五本剪りとりぬ今夜はスーパームーンとぞ
書店にてバイトの孫に頼み置く買いそこないし「漢字百選」
白菜と大根人参袋の底に柚子も五つ六つ入りて届きぬ
山芋は細くキャベツは小さくとも心ほのぼの野菜戴く
柿見れば母を憶ひぬ自然の味が好きと熟れ柿好みし母を
木枯しも止みてほっこり今朝ぬくし日向の縁の老い猫と我

零余子

豊川　内藤志げ

何時の間か女童の所に届きしやわれの拾いしピンクの靴は
やわらかき畑に少しの草を掻く突然に鳴る電線もがりなり
柵の鳥囀りつつもわれのそば渡りて間なきジョウビタかも
暮れ残るあかねの色に空の青夫の車にて市場に向う
蔓を手に触れればぽろりと草に落つ零余子を採るは初めてのこと
掌をすぼめ友の握りし手より受く小さき小いさき零余子の粒々
昔から体に良きと伝うらし今日も食みたり零余子数粒
澄みし空一番星と三ヶ月と真向ひにして市場に向う
動かざる竹より高きアンテナに向を変えいる一羽は鷺か
わが横に穂乃香の箸のみ揃えありそれに安まる六時の夕餉

身辺雑歌

岡崎　林伊佐子

種まきて育てる野菜の瑞瑞し自家栽培は鮮度を保つ

農仕事に赤字も黒字もかかわらず自然のままに育てる野菜

朝露にぬれたる草花(はな)をひと握りコップに活けてひと日始まる

ふる里は世外の城かと思いをり人の住まざる廃家の集落

どの家も雨戸閉ざして静かなる里は寂しき遊閑地となる

「毎日を明るく暮らせ」と娘(こ)に言われボケ防止となる畑の仕事

畑仕事を終へて見上げる茜空に飛行機雲は白く棚引く

収穫の白菜積みゆくシルバーカー今日の終はりの夕陽が照らす

生まれる双子の曽孫は女の子揃いのパジャマを二枚おくりぬ

曽孫等の成長たのしみ生きて行くわが残年も短かくなりぬ

縁側

豊川　安藤和代

友の作る南瓜で町内ハロウィンと新聞記事をほのぼのと読む
窓に見る公孫樹並木も色帯びて朝夕袖長セーターを着る
霜月は悲しき月よ嫁逝きて早も七年白菊の咲き
元気な頃夫の作りし棚使い今年も十粒の豌豆を蒔く
消しては書き書いては消した一首なりやはり初めの一首にもどる
あかときの冷えし木立ちに鴟のしきりに啼けば父母の恋しき
おさがりのバリカンで夫の髪つもるバアチャン床屋温き縁側
霜月四日細き三日月窓にありセーターの衿そっと立てみる
キャベツ苗植えし畠のスプリンクラー一ヶ所虹の一瞬が見ゆ
二番穂の青あおとして北風に負けず伸びゆく段だん田んぼ
「お年玉たくさんお願い」と外孫（まご）からのメールに夫は大きな笑い

落ち着かぬ

大阪　伊藤忠男

また一つ歳を重ねる神無月息切れ寂し駅の階段

久しぶりゆっくり過ごす山里に秋風吹きて稲穂が実る

長月を過ぎても続く暑き日々残暑と言うはいつまでのこと

久しぶり友居る街も素通りか過ぎ行く列車追う風の詩

青空に爽やかな秋虫の音も耳に入らぬ検査日の前

既往症書く欄足りぬ歳になり入院書類の煩雑なこと

我が不安増せば増すとて看護士の笑顔笑顔に救われるなり

何事も無きか静かな病室も外は木枯し吹く荒れ模様

何があれ落ち着かねばと言い聞かす我が身変化に乱るる心

逃げたくも逃げられぬか検査中脈打つ音がやけに大きい

茗荷

春日井　清澤範子

堤防の川澄みゐたり吾が夫と魚居るかと土手に寄りゆく

堤防に寄りて川面に波紋あり鮠（はや）泳ぎゐるを暫し眺めつ

病院へ行くバスに乗る紅葉の景色の裾に家建ち並ぶ

菜園の茗荷終りに近づきて今朝取りたるは花咲きてゐる

鳥の声したかガラス戸開けみれば庭の繁みより飛び立つ羽音

ピラカンサとげに気をつけ剪定す赤黄二色の実をつけゐるよ

久し振り神社に詣での散歩道はやひこばえの青く芽吹きぬ

猛暑猛暑続き続きぬこの夏はリハビリ散歩の日も少なく

十五夜の月は登りてまどかなり玄関の木犀の香り漂よう

雨戸開け朝陽入り込む玄関に匂ひうれしく木犀の香る

スーパームーン

沼津　鈴木孝雄

紅葉の久保田一竹美術館信じ難きの着物の極み

「ぶどうの丘」見渡す限りのブドウ畑見ながら味わう出来たてワイン

見頃過ぎし西沢渓谷紅葉は木樹にあらずや落ち葉彩々

雲隠れスーパームーンは見えねども大きな潮に砂浜失せり

ご来光みんなバンザイ叫べども夕陽の入は静かに見入る

駿河湾西に太陽沈みゆく北に富士山夕陽に映える

ホウレンソウ十日経っても芽を出さず見切りを付けて種蒔きなおす

オクラの株処分せんと近づけど咲く花を見てハサミを下ろす

カモミール領地争いカタバミと負けそうなので肩入れをする

春菊の発芽し苗の密すぎて勝手詫びつつ間引き作業

富士山

東京　森岡陽子

のびのびと草木の生ふる百花園松のみ職人枝葉整ふ

朽ちた実と返り花咲く木瓜の木は春と秋との季節のなかに

そよ風は萩のトンネル通り抜く白い蝶々黄色の蝶々

善光寺雷電関か大地震か一本ずらす殿の床柱

富士山は庚申（かのえさる）年生れとぞ講の掛軸猿田彦と猿

大木に何処まで絡むからす瓜上の葉下の葉朱実ののぞく

禅寺や八方睨む鳳凰画天井見あぐつられて睨む

歩道迄はみ出し実るたわたわと幟あちこち林檎狩りをと

一の酉まだまだ消えず臭の強さ落銀杏に爪先歩く

信濃路やはやくも旅の終る時名残りの酒と新蕎麦せいろ

平和

横浜　阿部淑子

元旦に天地四方へ頭垂(こうべた)れ平和の祈り響く柏手

初詣長き参列畏みて御神酒を頂く酉の絵皿で

新たなる年を迎えて夫孕寿家族揃いて祝う喜び

正月に南天・千両・万両と赤き実めでたく艶やかさ増す

健康で迎えし初春寿ぎて日々の感謝を綴りてゆかな

前進

東京　足立晴代

移り行く日々世の中は白、黒と激（はげ）しく変り眼玉白黒
健康を誇りに思い過し来て予期せぬケガにくやみて余り
木枯の吹きたることも知らずして飴見てびっくり七五三
日々過ぎて指折春の訪れを待ちて迎えむ新しきとし
九十の寿迎えし喜びも思はぬ不覺苦やみて余る
新しき春を迎えむ有志の友と揃って前進希望に満ちて

佐脇浜

豊川　白井信昭

佐脇浜上空にして残れるはただ美しい虹の断片

国道の傾斜を覆ふ葛の藪わけ入る中に紫立花

軒下の日当たり悪い狭庭辺に三度目植える幼野牡丹

今日もまた野牡丹ひとつ紫に蕾開きて吹くがに散らふ

妻と我海側の席に紫の明かり目に染むマリーナの夜景

朝より社の楠の樹々ゆらす天気予報は木枯し一号

快晴の三谷祭りとて珍しく御輿（みこし）の海ゆく渡御に歓声

小春日の白川堤ゆく道に薄の穂白くふうわりふうわり

満月の光は野原を照らしつつ行在所跡までの行き帰り道

五条川

蒲郡　杉浦恵美子

陶潜像貫名海屋賛書ける床の掛軸晩秋茶会

掛軸に貫名海屋見つけたり聞き及びたる名そぞろに懐かし

知らぬ間に寝入りたるらし覚めし時この寄る辺なさ晩秋の午後

ささやかな我の暮しに柿ありてその華やぎし色を愛でをり

次郎柿と富有柿とを並べ置き飽きず眺むる実りの秋を

幸せを些細なところに見つけたり柿に蜜柑に梨に酢橘に

訪ね来て初めて知りぬ五条川こんなに近く叔父の追善

五条川堤を暫く通過する叔父はこの川眺めて居しか

我が十代最も影響受けし叔父されど尾張と三河と隔つ

叔父逝きて七年この家の暮しはや叔父の居ぬのが平生となる

柊の花

豊川　山口千恵子

白妙のダチュラは根付き花の咲く夕暮れ甘き香の著し

光る処眼動かさず見てをれと医師に言はれつつ白内障手術

秋空に楠の大樹の枝さやぐ白内障の手術終へにき

秋の雲白しろ斑の美しき両眼くっきり景色の見ゆる

大型の機械に刈田起こされて忽ち麦を蒔き終へてゆく

柊の白き花咲く所より曲りて行きぬ今日のウォーキング

葉の間に白き小さき花の咲く香り届かず柊の花

白菜の芯に潜める夜盗虫つまみ出して踏みつぶしゆく

大根の未だ細き一畝（うね）の中より選ぶやゝ太きもの

しわの手にハンドクリームをすり込みぬ花の香のするフランスみやげ

三輪山（3）　登拝

豊川　夏目勝弘

下山する一団過ぐるをしばし待ち登拝口にて深く一礼

登拝口を一歩入りたり急階段目の高さには丸太の階あり

男性に靴を持たせ下りてきぬ泥に汚れし素足の白さ

山よりの水を桶もて導きて滝となしゐる三光の滝

網目なす木の根の広ごる参道より注連張りめぐらず中津磐座（なかついわくら）

どっしりと巨岩が磐座のイメージありあまたの岩の聚合休にて

大小の岩の聚合せし岩の隙間に神蛇の巳さん潜みゐむ

鬼の持つ金棒のごと粒つぶの棘ある幹のカラスサンショウ

山頂の奥津磐座は立入り禁止それでは早ばや下山と決める

一度ニ度スベリ転びて下山する靴洗場に順番を待つ

大豆

「月虹」鮫島　満

穀霊を宿すは大豆といふなれば節分の豆まづ口に入る

初午の市に売らるる火伏せ凧は大小どれも炎の色す

時分どきの蕎麦屋にゆるりと酒を飲む時雨の音の止みさうもなく

鳥らとてうはの空にて飛ぶことのあるらしひとつふらふらとゆく

秩父には借金なしといはれこし地大豆ありて美味なりと聞く

場ちがひの店に入りつる風情にてミモザの鉢にスミレ咲きたり

こゑ出ださばしはがれてゐむ冬木なる姫沙羅の実の乾ひ残るは

消えがたき呪ひを負へる如くして鉢皿の裏に蛞蝓がゐる

ひと枝のみ重き花ぶさ持たされて散るまでの苦と耐へゐるごとし

抽出ゆ肥後守三本出できたり万の草の芽木の芽殺めし

歌集「夢のつづき」

水上信子

酒を飲み飲み続けつつ年越せり愉しからずや初春の夢

焼き牡蠣と鱈鍋かこみ飲み明かす満月明かし松島の海

古稀の文字をわが身に冠せられし日によき人どちと飲める旨酒

永らえることの是々非々問わざりき古稀とう年月われは生きたり

寝台車を二夜乗り継ぎて辿りつくシルクロードの始まりの駅

地の果てと空の果てとの重なりにさえぎるものなし動くものなし

風多き地なりと聞きし安西の砂漠にあまた風車まわれり

らくだの背に揺られて砂の道月の砂漠を歌いつつ行く

風紋に映るわが影踏みちらし侵略者のごと砂丘を登る

炎熱の砂漠の下に千仏の壁画列々莫高石窟

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

雨止みて夫と見てをり三方五湖連なる湖（うみ）は墨絵のごとし　稲吉友江

幼子のゐなき我が家の玄関にハロウィン飾りて我のみ見てをり

障害を持つ娘（こ）と友は四十余年やうやく赤きTシャツ買はむとす　鈴木美耶子

いただきし夕影草の白花の萎みてしまふあはれ一花

被布を被ひ簪（かんざし）つけて我が幼日前（ひのくま）神宮の神殿の中　吉見幸子

神殿に太鼓の音響きつつ孫との佳き日心に沁みくる

男子組女子組とわかれ中学生らいよいよ騎馬戦は孫はどこにか　牧原正枝

たんたんと女子の騎馬は位置につく一気に行くのか顔付き変はる

隣組名ばかりなるか悔み事すべて終りて日常のなる　石田文子

久々に孫の声聞く電話口やはらか低音大人の声して

わが窓をとほして夜半の月光る今宵あたかも十五夜の月
十五夜の月を見むとて庭に佇てば亡き父のことまたうかびくる

森　厚子

夕焼けに飛行機雲は金に染め黒き山の端に静かに消えつつ
御引上を勤めくだされし僧の読経冴え冴えひびき仏間の静けさ

山﨑俊子

金木犀のかをりの風が通り過ぐ自転車通学の生徒らも通る
わが庭に初めて咲きし藤袴アサギマダラよ早よ飛んで来よ

三田美奈子

線路脇の真っ赤なカンナは誰が植ゑしか夏日に向きて高々と咲く
今まさに遠望峰（とぼね）のホテルを呑み込むる山霧湧くごと動きつつあり

水野絹子

春日山に皆々集ひて草取りす夫の桜も植ゑて六年
わが畑に落ちず残りし柿二つ色づきたるもいつしか無くなり

牧原規恵

現代学生百人一首

東洋大学

辛いから逃げたくなるけど逃げないと決めた私は今日も靴をはく

駒込学園駒込高等学校一年（東京都）　斉藤美奈

携帯のカメラロールをスクロール時の流れの速さに気づく

星美学園高等学校二年（東京都）　藤波ほのか

本当は待てぬ返事を「待ってます」口にするのは僕の弱さか

専修大学附属高等学校三年（東京都）　高木蔵治

体張る桜の戦士五郎丸世界に響いたキックのフォーム

東京都農業大学第一高等学校三年　大場歩

落ち込んで「辛い」とぼやく僕の手を祖父が黙ってギュッと握った

東洋大学大学院一年　小田切　拓

爽やかな虫の音ひびく秋の夜雲のすき間に輝く名月

山北町立山北中学校二年（神奈川県）　鈴木　惇也（あつや）

いがいがのいがの中からこんにちはひきこもりからぬけだす季節

山北町立山北中学校二年（神奈川県）　長崎　優希音（ゆきね）

ホームドア人の体は落とさずも心の転落守りはしない

神奈川大学附属中学校二年　神庭　芳史（かんばよしふみ）

私の一首

有明の月と佐脇浜の沖つ風に波は寄りくるわが足もとに

白井信昭

有明の月に明るい御津町佐脇浜の埋立企業団地。沖合西より吹く風に波が護岸堤に打ち寄せる。静かに静かに立って月光を浴している。

寒木瓜は皇居の庭に赤い花黄色に咲くは石蕗の花

森岡陽子

小春日和のある日　皇居の東御苑を友達と散歩した。陛下と皇后様の御手植えの柑橘類には実が沢山実り、寒木瓜に赤い花が、石蕗は満開の黄色い花、冬桜も咲き、素敵なお庭でほんわかとした一時を過す。

ゆきのうさぎ

高橋育郎　作詩

まっしろゆきの　うさぎさん
二つなかよく　ならんでた
まほうの国から　きたのかな
お庭にゆきが　つもってた

ぼくがおねんね　してるとき
かあさんつくって　くれたんだ
おめめは赤い　なんてんの実
おみみはみどり　なんてんの葉

まっしろゆきの　うさぎさん
春の野はらで　はねている
十五夜月夜に　ぺったんこ
おもちをついてる　夢みてる

おひさままどから　こんにちは
ゆきのうさぎは　まぶしそう
だんだんとけてく　さびしいな
でもねおもいで　ありがとう

『俳句』

短日の日を拾ひつつ帰りけり
時に色あらば何色冬の星
極上の日和となるも日短し

山元正規

小夜時雨テールランプを滲ませて
早朝の落葉を飛ばす掃風機
冬ざれや放置田畑に鳥遊ぶ

山迫京子

短日やはや灯のともる路地の家
さくさくと砂利踏む音や冬の月
威勢良き手打ち聞ゆる酉の市

森岡陽子

木枯や絵馬の重なる大師堂
六枚の落葉を描く写生帳
明星の一粒光る暮早し

田中清秀

木枯や堀に当りて渦巻きぬ
曲るたび声の沸き立つ紅葉かな
松在りて茶色も在りて紅葉映え

重野善恵

常の日と変はることなし神の留守
隈笹の隈くっきりと冬に入る
一茶忌に間に合ひにけり信濃旅

今泉由利

居酒屋の外は闇裂く鰤起し
花枇杷や祖父母も孫もゐる隣家
短日の雨戸を閉じる無言の日

松本周二

色あせて置かれしままの冬帽子
叱りつつ直す衣裳や七五三
礼拝（らいはい）の作法習ふや神の留守

米田文彦

短日の行きも帰りも暗き中
東京の十一月にぼたん雪
短日の夜こそよけれ旅の宿

柳田晧一

蒼天や突き刺すように冬木立

冬夕焼二三歩あゆむ遠目癖

冬日ざしモデルルームの白ワイン

着ぶくれて町内会の回覧板

針穴に目を細めゐし今朝の冬

日に透けし葉の一枚や冬隣

相席のきっかけとなり牛膝（いのこずち）

団栗独楽愛しきものに加えをり

植村公女

かさね吟行会
「雑司ヶ谷・鬼子母神堂」　十一月

田中清秀

人の子を食べたという母鬼はお釈迦様の諭しで改心し子供を守る神様になった鬼子母神（きしもじん）、お祀りしている鬼子母神堂には子宝祈願や安産祈願で多くの参拝客が訪れる。今回のかさね吟行会はこの鬼子母神堂の他、雑司ヶ谷霊園と酉の市で有名な大鳥神社を訪ねた。平成二十八年十一月十一日、久しぶりの雨の吟行となった。大塚駅に集合した後、都電荒川線に乗り替えて雑司ヶ谷駅に向う、まず初めに雑司ヶ谷霊園を訪れる。ここには夏目漱石、永井荷風、小泉八雲などの多くの著名人の墓がある。ただ、園内には案内図だけでその有り場所を示す看板がなく、あちこちと迷いながら見つけるのに苦労する羽目となった。

探し当つる文豪の墓冬の雨　清秀
曇天の墓地に散り敷く銀杏かな　善恵
悴みて文士の墓を巡りけり　皓一

椅子の形をした堂々と構える夏目漱石の墓石、意外と小さな竹下夢二の墓所など色づいた木々のなかに静かに眠る故人の墓を拝みながらその業績を偲びつつ寒さにめげずに散策を続ける。

次に大鳥神社へと向かう。住宅街を抜け都電の踏切を渡り、左右に大木の欅が並ぶ参道を進むと社殿を守る大きな狛犬が我々を迎える。大鳥神社は明治の神仏分離令で鬼子母神堂境内からこの地に遷座された。江戸時代の武江年表によると「十一月酉の祭りとて詣づること始まる、是より年々賑わえり」とあり、権現造の社殿は今もなお商売繁盛を願う人びとで賑わっている。

雨空の昼を灯ともす酉の市　正規
あるだけの福を飾りて大熊手　京子
雨曇り夜店を急ぐ酉の市　素山

幸運にも訪れた十一日は丁度一の酉に当たった。境内は夜店の準備中で熊手を積み上げた屋台に半被姿の売り子達が談笑している、照らし出す昔ながらの裸電球が眩しい。飾られた縁起熊手は福をかき込むと言われ売り手と買い手の商談がまとまると威勢良く「ヨーッ」と手締めが打たれる。また、社務所で酉のお守りを買うと福引

き券がもらえ抽選で金銀の小判が当たるとのこと、福納めに買えばよかったと悔やまれる。なお、今年は三の酉がなく二十三日の二の酉までとなる。

次はいよいよ鬼子母神堂である。正式には威光山法明寺、参道に入ると樹齢七百年と言われる天然記念物の「子授け銀杏」の大木がそびえ、正面には立派な本堂が姿を見せ静かな中に線香の香りが匂う。布で編んだ綱で鰐口を叩き参拝を済ませる。飾られた絵馬にはザクロの絵が描かれている、「人間を食べたくなったらザクロの実を食べて我慢しなさい」とのお釈迦様に諭されたとの伝説もあるが、ザクロの実の中には小さな実が沢山有り子孫繁栄の吉祥果と言われることに由来するらしい。また、参詣の土産は風車や川口屋の飴などと共に芒の穂を束ねて作った伝統ある「すすきみみずく」が人気だと言う。

鰐口の綱の湿りや神の留守　さち子
冬めくや灯り乏しき鬼子母神　陽子
木菟の大群かと芒原　由利

なお、鬼子母神の「鬼」の表記がここでは第一画目の点のない字を用いているがお釈迦様に諭され改心した結果頭の角が取れた為であるとか。

散策の後の昼食は雑司ヶ谷の割烹大倉が経営する料理店で天ぷら定食となった、雨の寒い散策のあとで思いのほかの美味しさに皆舌鼓を打つ。ここで腹ごしらえをして締めくくりの俳句作りへの英気を養う。

句会場は雑司ヶ谷地域文化創造館の和室において、いつも通りの嘱目三句、四句選で行われた。その後活発な俳句談義に花を咲かせ雑司ヶ谷巡りの吟行は無事散会となった。

鬼子母神Ⅰ
(C)SHOGAKUKAN INC.

■かさね吟行会■

日時　一月十三日（金）
場所　目黒自然教育園庭園美術館
集合　自然教育園 正面玄関　十一時
申込　森岡陽子宛 (03)３７１２・２８３５

『酔いの徒然』（五七）

丸山酔宵子

『呑兵衛とお粥と謝甜記と』

呑兵衛にとって、お恥ずかしい限りであるが、年齢を重ねても、ついつい飲みすぎての二日酔いは、どうしても避けられない。そんな時、「お粥」特に「中華粥」に遭遇すると何とも言えない安心感と蘇生感をお覚えるのである。平日は日比谷や銀座を中心に動いているのであるが、そんな不甲斐ない昼食時には、日比谷「慶楽」、銀座「好々亭」に行って、熱々の中華粥で汗を流し、夕方のビールに始まる饗宴の準備に備えるのである。そんな中華粥の極め付きが横浜中華街にある。

コーネルサンダース風のサンタクロースが唐突に立っている店先入り口には、午後1時を過ぎても長い行列が続いている。ここは横浜中華街、中華粥と言えば中華街上海路にある「謝甜記」の貳号店。東急東横線が営団日比谷線と手を切って営団副都心線と提携し、埼玉からも直通で横浜経由元町・中華街に乗り入れた影響か、平日昼下がりでも、美食を求める中高年毎日が日曜日風男女で一杯である。

「謝甜記」のお粥は、生の米から乾燥牡蛎、乾燥貝柱そして鳥一羽丸のまま入れて約4時間ぐつぐつ煮込むという創業昭和26年以来の伝統を受け継いでいる。現在では、塩に特にこだわって「セル・マラン・ド・ゲランド」と言うフランス原産の物を使用し深い味わいをだしている。このお粥だけでも十分コクのある味が楽しめるわけであるが、鮑魚粥（あわびかゆ）、鮮蝦粥（えびがゆ）、什錦魚生粥（ごもくかゆ）、青菜粥（やさいかゆ）、豚肝粥（レバーかゆ）、牛肉粥（牛肉かゆ）など、何と19種類もの中華粥がある。値段も一番高い鮑魚粥（２２７０

円）を除いては、１０００円以内でハーフサイズもあるのだ。

晩秋の昼下がりの柔らかな日差しの中、元町から中華街まで歩き、乾いた喉にビールを飲んでいると、いよいよメインディッシュのお粥が中華揚げパン（油條・ヨウティアオ）とともに運ばれてきた。油條をお粥に付け込んで頬張ると、お粥のコクのある味がしみ込んで、ビールの絶品のアテである。

因みに、中華粥とサンタクロースとの取り合わせは奇妙に見えるが、そのいわれは戦後まもなくの創業時中華街大通りにはまだ20軒ほどしか店が無かった頃のこと。謝甜記の向かいの外国人向けのＢＡＲが、クリスマスシーズンにサンタクロースの看板を出していたのだが、暫くして閉店、謝甜記が譲ってもらうことになった。「謝甜記も美味しい料理を提供し、サンタクロースのように、皆に愛される存在になりたい」との一念で店のマスコットにしたそうだ。それ以来中華街を見つめて60年、子供にぶたれたり倒されたり、酔っ払いに蹴飛ばされたり・・・現在のサンタクロースは2年前、フィリピン特注だそうだ。

汽笛ありチャイナタウンの秋の声　　**酔宵子**

本からのあれこれ（14）

米田文彦

「十一面観音」

滋賀県湖北地方に美しい観音像を拝観しに行ったことがある。この地方には優れた仏像が多いのだが、渡岸寺十一面観音は特に素晴らしいと言われている。

米原からＪＲで北へ、高月という駅で降りる。初めての場所だったので駅前で自転車を借り、道を訊いて行った。穏やかな景色の中にお寺があり、脇の小さく簡素なお堂にその観音は立っていた。私のほかに人はいない。

観音の美しいお顔、豊かで均整の取れたお身体、異常と言えるぐらいに長い右手、いかにも今から歩き出そうかという動き。そして頭上には優しいお顔、怖いお顔、心中は泣いているお顔、を載せている。

この観音は平安初期の作、檜材の一木彫だそうだ。湖北のこの地は幾多の争乱の地でもあった。織田信長と浅井長政、お市の方の小谷城、秀吉と柴田勝家の木ノ本、賤ケ岳も近い。土地の人々はこの観音を守るために土中に埋めて守ったこともあるという。

長い年月を見て来られた十一面観音と、対面している私。静かで贅沢な時間だった。

数年後に再度拝観に行った時には、駅近くの床屋さんで散髪し荷物を置かせて貰った。このことすらも楽しい想い出となっている。

私は観音菩薩についての知識はあまりないのだが、言われるところでは、菩薩とは悟りを求める人という意味があり、如来の境地に至ろうと努めている存在という。しかし、観音が菩薩であるという意味は仏になろうと修行中の人、という意味ではなく、本当は仏であるのに衆生救済のために菩薩となって現世へ下って来ているということだそうである。慈悲のあまり安閑として浄土の仏の座にいることができなくなって民衆救済に向かわれるのが菩薩だそうだ。

白洲正子の「十一面観音巡礼」は、「渡岸寺の観音の

作者が、どちらかと云えば、悪の表現の方に重きをおいたのは注意していいこと」として、真後ろにある「暴悪大笑面はあきらかに悪魔の相であり、一つしかないのも同じく一つしかない如来相と対応しているように見える」という。そして「私が感動するのはそういうことを無言で表現した作者の独創力にある」と記述した。

即ち、「この観音が生き生きとしているのは作者が誰にも、何にも頼らず自分の眼で見たものを彫刻したからであったに違いない」「ひとりの芸術家が気質と才能に応じて過去の経験から造りあげた精神の結晶に他ならない。

そこに形式に沿いながらとらわれない個性的な仏像が出現した。ものを造るとはものを知ることであり、外部の知識や教養から得ることの不可能な、ある確かな手応えを自覚することだと思う。」と言っている。

私は学生時代に弓道を学び、社会に出てからはお休み状態だったが、五〇才ぐらいから再開した。よくあるパターンの弓道人生であり偉そうなことは言えないのだが、弓を引く醍醐味は離れの瞬間にあると思っている。正しい射をして離れを出せば的中する。そしてそれは永続する。私の習った日置流では「中貫久」を目標とした。中る（あたる）、貫く（矢に勢いがあって深く貫く）、それが久しく続く（いつでもできる）、という意味である。良い矢を出せるか否かは、簡単に言えば、矢を飛ばす瞬間の「離れ」に掛かっている。

良いか悪いか、他の人が見ていても分かるのだが、年数を経れば一番分かるのは射手自身、自分である。

そして、本当に「いまの離れは良い」と自覚するのは、白洲正子の書いた、「ものを造るとはものを知ることであり、それは外部の知識や教養から得ることの不可能な、ある確かな手応えを自覚すること」と相通じていると思っているのだ。

白洲正子、夫の白洲次郎の晩年の旧宅は町田市鶴川にあり、「武相荘」と名付けて暮らしていた。「ぶあいそう」、無愛想の諧謔かと思うが、いまは一般公開され清らかに管理されていて、調度品、四季折々の草花、庭と裏山などと共に美しい。

ある自然科学者の手記（56）　大橋望彦

『生・若・老・死』

29）「卒業研究」

四年生になって、正式に卒業研究に入る時が来た。高槻教授に呼ばれ、どんな事をしたいか、尋ねられた。それで出来れば「癌の生化学的な研究」が将来したいので、それに続けられるようなテーマは無いでしょうかと伺った。暫くしてから、小生と永瀬が教授に呼ばれ、思いもかけない話を聞かされた。高槻先生は東北大学出身でその関係から、現在は昭和医大で医動物学教室の教授をされている森和雄先生と話したところ、二人ともいらっしゃいと言うことだったそうであった。

山手線の五反田駅で東急池上線に乗り換え、旗の台駅から歩いて約五分の所に昭和大学の医学部医動物教室があった。木造建ての二階に研究室があった。森和雄教授は小肥（こぶと）りの顎の張った顔に黒縁（くろぶち）のロイド眼鏡をかえ、中々精悍な感じのする先生だった。助教授の一井昭五先生は、名前からして昭和五年生まれで、我々と同い年であったが、旧制で大学に進んだ組で、背が高く貫禄があった。課せられたテーマは、「動物に発癌物質を投与した時に生ずる肝の酵素変化」であった。永瀬君と一緒に仕事はしたが、論文を書くときは、永瀬君は「アミラーゼとカタラーゼの変化」を担当し、小生は「アルカリフォスファターゼとカタラーゼの変化」を担当することとなった。ラットにバターイェロー（ジメチルアミノ・アゾ・ベンゼン）と言う発癌物質を餌の米に塗（まぶ）して与え、時間の経過と共に、五匹ずつ一群として屠殺し、その肝臓を生理的食塩水で灌流後摘出し、チョップしたのち緩衝液でホモゲネートした。この遠心分離した上清が酵素抽出液で、その一定量を採ってそれぞれの酵素活性を測定した。実験群は、肝の肥厚した状態、肝硬変が観られる状態、肝癌の出来ている状態の三期に分けて行われた。この実験の結果を纏めて論文にして、「ＧＡＮＮ」という日本癌学会誌に投稿し、我々の分担課題名で著者として一つは、永瀬・大橋・一井・森、もう一つは、大橋・永瀬・一井・森、の順序の論文が出来た。実際には論文の大部分は森先生が書いて下さったようなものだが、英文の論

文はこれが最初の論文となった。これが、大学の卒業論文となった。本当に森先生にはお世話になりました。

30）「科研の研究生時代」（S29・4・1～S31・3・31）

科研の研究生となる。佐藤匡美君と一緒。

主任研究員の鵜上三郎先生のところで、樽谷和男さんの仕事を手伝う事が小生に命ぜられた。乳腺の授乳時期だけに産生される特殊な物質の同定がメインテーマであった。当時は、最新の手法であった二次元ペーパークロマトグラフィーという方法を用いて、乳腺の組織から抽出した物質の分析をすることであった。当初は、ニンヒドリン陽性の性質があり、二次元クロマトグラフィーの展開像の解析で、アンダーリジンという名前が付され、小さな分子のペプタイド類と考えられていた。それが、乳腺の一番増殖の盛んな時期に沢山産生され、特に乳腺に特異性が認められることから、ママミンと改名された。段々分析が進んできた頃であるが、丁度12月24日クリスマス・イブの夜である。突如、樽谷さんが「大橋君、来て見ろよ‼」と大声で叫んだので、急いで彼の所へ行くと、顕微鏡を覗けというので観てビックリしたのである。なんと其処には、見事なクリスクロス（十字架）の結晶が見えるではないか。結晶化したことは、純粋なものが得られたことを意味していたのでその喜びは半端ではなかったのである。当然その夜は二人で、祝杯を挙げることと相成ったのは当然といえる。

結局、このママミンの結晶は四種類のジアミン、即ちプトレシン、カダベリン、スペルミン、スペルミジンの混晶であることが判明した。この結果が、樽谷さんの博士論文となった事は当然であった。

ジアミンが増殖の盛んな組織に多く含まれることは、その頃は余り知られていなかったので、これが癌組織ではどうなっているかという問題が当然意識された。その後このジアミンに関する研究はどんどん進み、癌組織でも増殖促進因子として認められるようになった。

31） 中原癌研究所長に、癌研に入りたいとお願いしたら「研究者に成りたいならば、大学院を出て来なさい。」と断られる。

絹の話（74）

「アトリエトレビ」今　泉　雅　勝

蜘蛛の糸

最近蜘蛛の糸の話しが時々新聞などで報道されて話題をよんでいます。

蜘蛛の糸は蚕から採った絹糸より細くて、伸縮性や様々な機能性に優れているという事で世界中の研究者、ベンチャー企業が21世紀の革命的な新たな繊維を作ろうと熾烈な開発競争をしています。

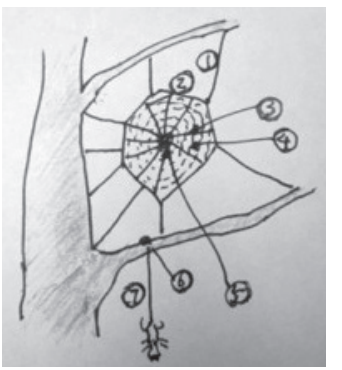
蜘蛛の糸ってどんな糸

地球上には4万種類もいて、日本には1500種位いるようです。今注目されているのは蜘クモの巣の糸です。多種あるクモの中で、巣を作って獲物を捕獲するのは半数くらいで、他はハエ獲りクモ様に徘徊して餌を獲るもの達です。

クモの巣の糸はアミノ酸で構成された蛋白質繊維ですのでれっきとした野蚕絹の範疇に入る絹糸です。クモはお尻から必要に応じて7種類の糸を出すのですが、どの部分がし生産対象になっているか秘密にされていて窺い知れません。

【その7つの糸とは】

1 木の枝などから巣を吊るす太くて伸縮性のある繋留糸。
2 外側の枠糸。
3 枠糸の中で、巣の中心に向かって延びる4本の細い糸を一本に束ねて作られている強靭な縦糸。
4 巣をぐるぐる回るネバネバした細い2本の糸を束ねた横糸（粘る糸はこの糸のみ、縦糸より強度は弱い）。
5 巣の真ん中で蜘蛛が獲物番に常駐する、こしき糸。
6 クモに危機が迫り、細い糸をお尻からひきながら逃げる時、その糸を木の枝などにしっかりくっ付ける付着盤。
7 逃げる時専用の牽引糸。（クモは巣の真ん中にいる時も牽引糸をこしきにくっ付けて獲物を待っています。



その他、クモの巣ではないが、獲物がかかった時、獲物に飛びついて糸の束を噴水の様に出して獲物をグルグル巻きにしてしまう捕獲帯。この糸は不思議な糸で、かかった獲物が暴れるとドンドン縮んで締め付ける様に出来ています。まだ解明はされていませんが、獲物が腐敗、乾燥しない様な抗菌性と保湿性も他の部分の糸より優れた機能を持っている様に思えます。

さらに卵を保護する卵のうも絹なのです。

クモの糸は強くて柔らかい

スパイダーマンが細い糸にぶら下がってビルからビルへ飛び移っていく映画の場面は良く知られています。クモが木立の間をサット音もなく移動する姿に習ったものでしょう。クモの牽引糸は通常活動に必要強度の2倍に設定され、まさかの時の為の安全対策が組み込まれています。ナイロンの数倍、伸縮の弾性率も3倍強もあります。

クモの糸は、非結晶域の中に固い結晶域が浮かんでいる様な構造になっていますので、非常に柔らかく何にでもからみ易いのです。

ボールペン1本の太さでジャンボジェット機1機吊す事が出来るといわれる所以です。

蜘蛛の糸は紫外線に強いか

タサール蚕の繭はタンニン等の色素で紫外線防御していて、黄変する事は殆ど有りません。

しかし一般の白い繭は色素を持っていないので、直射日光などに当たり続けると黄変し劣化してゆきます。ところが、日中捕食活動するジョロウグモ等は夜半に半分巣をはり、朝紫外線が当たりはじめると5時間位どんどん強度を増して行き、自分よりいい気な獲物も捕獲出来るのです。夕方には強度は衰え捕食活動を終えて、また夜半に半分をはって翌日に備えます。

夜間に補食活動するスグロオニグモの糸にはそのような機能は必要ないようです。

紫外線が当たると強度を増す繊維など他に有るでしょうか?この機能の解明が待たれます。

蜘蛛の糸は熱に強い

クモの糸は夏の戸外で長時間高温にさらされても物質変化を起こさない様に作られています。

化学繊維のポリエチレンなどは120℃が限界温度であるのに比べて、250℃まではびくともしません。350℃で変色して来ますが耐えられます。

この耐熱性は一般の絹にも同じ様な事が言えると思います。

蜘蛛の糸の利用

クモの糸はまだまだ未知の部分が多くて、今後の研究の進展により更なる新発見が期待されます。

一口にクモの糸といっても糸の部位によってそれぞれ機能性が異なりますので、未利用資源の利活用が注目されている今日、クモはまだまだ私達に多くの事を教えてくれるでしょう。

現在家蚕の絹で医療用素材開発等の研究がクモの糸にとって代わる時代が来るかも知れません。

短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人—　六十四回

「月虹」鮫島　満

十八　橋本徳寿　3

前号の終わりの部分に、軍属として南方に向かう徳寿の乗った船が東シナ海上にてアメリカ軍の魚雷によって沈没したこと、徳寿は奇跡的に助かったこと、それは昭和十七年五月八日であったことを述べた。

その後、一旦帰国した徳寿は五月十九日に茂吉を訪ねている。その時のことを茂吉は、

生死（いきしに）のさかひを超えし君の顔つくづくと見て涙いでむとす　（『霜』）

まのあたり君をあひ見て涙いづ生死のさかひ今ぞこえたる

と詠み、続いて、「五月八日橋本徳寿君の乗れる船中おのれの旧著数種もありて、しづみぬと聞けば」の題詞のもと、

とほく行く君のカバンに入りありしわが書（ふみ）ここによみがへるあはれ

わた中に入りしわがふみ時のまも思ふ時にし君に感謝す

とも詠んでいる。

徳寿はこのあと七月十七日に再渡航、シンガポールで木造船建造の設計、指揮のために昭和二十年八月の敗戦まで任務に就いたのであった。

先生よりの『軍事郵便』をかくしたる袋脊負ひぬ俘虜なるわれは　『ララン草房』昭和二十九年刊

俘虜としての足取りを歌集『ララン草房』の題詞によって辿ってみる。「英軍の命令にて、九月五日シンガポールを退去し、ひとまづジョホール州内の精神病院におちつく」「さらに転々と移動を命ぜらる、小屋の設営やうやく成りたりと思ふと移動の命いづ、行く先々にて眠る小屋をみづから造り、移動のたびに荷物の大半を捨つ」「九月十二日レンガムのゴム林に移る、ここに十一月二十七日まで置かる。（中略）協力してララン草葺の掘立小屋を作る」「連合軍より、シンガポールの南方、赤道直下の無人島、蘭領リオ群島中の一小島レンバン島に、移動を命ぜらる。十一月二十八日レンガム発、二十九日クルアン飛行場にて降伏式あり、戦犯関係のきびしき調べを受け、また所有物の検査をうけ、時計その他、意のままにとりあげられる」「十二月一日シンガポール出帆、レンバン島に着く。（中略）一日六勺の米のほかに殆ど配給なし、自給自足せんにも、まづ密林を拓いて耕作地

となさざるべからず。住む小屋をつくらむにも約五十人に対して、歯のこぼれたる鋸一つと斧一つ以外にはなにもなし、釘もなし。過労と栄養不足に人々急激に衰へゆきたり」

徳寿が浦賀に上陸したのは昭和二十一年二月十二日、五十二歳のときであった。右の歌にある茂吉からの軍事郵便も、厳しい移動や取り調べの過程で行方がわからなくなったであろうことはたやすく想像できる。

わが妻が君にひとたびまみえたるをいくどもききぬ生き帰還りきて　同

みちのくの訛りにわれをはげましし君がこゑなしうつしみのこゑ

妻との会話に茂吉のことがたびたび出てきたのであろう。妻にとってはただ一度の茂吉との面会が忘れられないことだったのであり、徳寿にとっては茂吉の声までがありありと思い出されたのである。

うつしみはしだいしだいにあはあはとなりたまひしやその鰻さへ　同

ある人の調査によると、昭和十年からの十年間は「毎年二ヶ月近くは鰻で生きていたことになる」というほどに鰻好きの茂吉であったが、晩年には、「ひと老いて何のいのりぞ鰻すらあぶら濃過ぐと言はむとぞする」（『つきかげ』昭和二十三年）と詠むほどに衰えつつあった。長い間、茂吉の活動や作品に注目していた徳寿には寂しいのである。

みづからの戒名書きて黙読しあるときは低く声に読みきや　同

茂吉の戒名は「赤光院仁誉遊阿暁寂清居士」であり、これは茂吉が生前に自ら選んであったものである。徳寿は、茂吉はこれを書いてみては声に出して読んだことがあるのではないかと思ったのである。因みに、墓碑「茂吉の墓」も茂吉が自ら書いてあったものである。

あかあかといのちもえつつかがやきし生といへども死にたまひけり　同

あぶらだち燃えたる茂吉先生も息せぬ顔をゑがかれにけり

これらの歌を詠むとき徳寿の心には、たとえば「あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり」（『あらたま』大正二年）や、烈しかった論争膨大な業績を残した生涯が思い浮かんでいたと思われる。

楽しい時間　50

山本紀久雄

2016年11月30日

伊藤若冲を佐野市に訪ねる…その一

今、伊藤若冲が大人気である。正徳6年（1716）生まれであるから、今年は生誕300年に当たる。若冲が生れた年は、徳川吉宗が8代将軍となり、翌年には吉宗が進めた享保の改革を支えた大岡忠相を江戸奉行に任命した時代。

若冲生誕300年を記念し、東京都美術館（2016年4月22日～5月24日）で「若冲展」が開催され、会期1か月余りの間に、来場者44万6千人の超大入り、1日当たり15000人弱と驚異的な入場者数で、最高待ち時間は320分を記録するなど、首都圏を中心に大ブームを巻き起こした。

現在の若冲ブームは、1970年、現在はMIHO MUSEUM館長である、東京大学名誉教授の辻惟雄氏が出した『奇想の系譜』という本がそもそものきっかけだった。

それまで、日本文化の象徴とされていた「わび」や「さび」から外れてしまっていたために、日陰に置かれていた日本美術や画家たちにスポットを当てたこの本によって、伊藤若冲や曾我蕭白などの画家たちが再評価されるようになった。

若冲が評価されているのは、その画風と人生が独特であったからといわれている。画風は、羽の先まで緻密に描き込んだ鶏や、葉先の虫食いまで執拗に描きこんだ植物たちなど、見る人を圧倒させる画力を持つ若冲。その一方で、野菜を擬人化させた絵や、のんびりかわいらしい人形の絵など、ユーモラスな絵もたくさん描いている。

さらには、西洋画を彷彿とさせるようなモザイク風の絵や、版画、石像などさまざまな分野にもチャレンジ。加えて障壁画や絵を熱心にお寺に寄進するなど、絵にまつわる「ひきだし」と「バイタリティ」の多さに驚く。（参照　美術館ガイド　浦島茂世氏）

この若冲ブーム、一段と盛り上がって来たのは、2000年の京都国立博物館で開催された「没後200年　若冲展」で、動植綵絵を始めとした140点程が揃ったこの大回顧展でフィーバーした。

2012年には、アメリカのワシントン・ナショナル・ギャラリーで「Colorful Realm」（カラフル王国）というタイトルで1ヶ月（3月30日～4月29日）開催し、連日、大盛況。来場者1日平均7100人と、モナ・リサ（1963）、ツタンカーメン展（1961、1976）、フェルメール展（1995-96）などに並ぶ大人気で、ヒット展覧会トップ10入りし、2012年の美術展世界ランキング第2位となるほどの熱狂であった。

現代、若冲人気はさらに拡大し続け、若冲の絵はデザインとしてみても面白く色々と応用が利き、グッズ化がし易いことも人気の一因といわれている。

若冲は寛政12年（1800）に没したが、与謝蕪村、池大雅、丸山応挙、曽我蕭白、長沢芦雪らとともに江戸中期の京都を代表する画家である。

若冲は錦小路の青物問屋の主人で、経済的に恵まれていて、家業の傍ら狩野派の画法を学ぶが飽き足らず、中国画の模写や実物写生で独自の画境に達したといわれ、40歳で弟に家督を譲り、以後85歳で没するまで画事に専念したが、あまりに絵が好きすぎて、家からほとんど出ずに、縁側に放し飼いにした鶏をスケッチし続けていたという逸話があるほど。つい最近まで「オタクの元祖は若冲

では?」と言われていた。

この若冲の重要文化財作品『菜蟲譜（さいちゅうふ）』が、佐野市立吉澤記念美術館で展示されていると知り、11月8日東北新幹線で小山駅に向かった。

小山市は、栃木県南部に位置し、人口は約16万7千人。県都宇都宮市に次いで第2位の人口をもつ都市である。

小山市はずい分前に一度訪ねたことがあるが、すっかり街並みが整備され変わっている。駅前広場で目に付くのは「リオ・オリンピック金メダルの萩野公介さんは小山市出身」という幟である。地元の作新学院高等学校から現在の東洋大学へ進学している。

この萩野選手がインタビューで次のように語っている。（THE NIKKEI MAGAZIN STYLE）

「僕がまだ社会へ出ていないので、偉そうなことは言えないんですけど・・僕らの世代ってもうダメってなってからできる人たちが多いと思うんですよ」

この22歳の萩野選手発言、意外に感じる。「物事をあきらめない」という意味にとれ、最近の若者意識が変わってきたのかとも受け入れられるが、最近、他の場面でも、若者心理変化について気づくことが度々あるので、一度分析してみたいと考えているところ。

いずれにして『菜蟲譜』と対面するためには、小山から佐野市へ行かねばならない。バスに乗車し、約1時間要する。住所は栃木県佐野市葛生東1－14－30。

佐野市立吉澤記念美術館は、地元の旧家・吉澤家のコレクションをもとにつくられた佐野市の美術館で、『菜蟲譜』は、前半が四季の野菜や果物、後半には昆虫やは虫類などの生き物が描かれている全11メートルにも及ぶ絵巻物である。

昭和2年（1927）の恩賜京都博物館の展覧会に伴い刊行された『斗米庵若冲画選』に掲載されて以来、所在不明の作品だったが、平成11年（1999）秋、72年ぶりに吉澤家で所蔵されていると公表され、平成21年（2009）に国の重要文化財となった。さて佐野市立吉澤記念美術館に到着し、絹本着色画である『菜蟲譜』の前に立ち、長い絵巻物に描かれた絵を観察すると、細部にいたるまで、細かく、ユーモラスに描かれている。かわいいカエルがたたずんでいる場面や、細かいひげ根まで描き込んだ里芋、色とりどりのきのこ類など、全てが見所である。

美術館内売店には、『菜蟲譜』に登場するかわいらしいカエルをモチーフにしたバッグや手ぬぐい、マウスパッドなど、この美術館でしか手に入らない、オリジナルグッズも充実しており、若冲ファンなら、ぜひ手に入れておきたいアイテムといえる。

では、どうして、佐野市立吉澤記念美術館に『菜蟲譜』が展示されていることを知り、佐野市まで行こうと思ったのか。それには我が師匠が絡んでいる。次号で経緯を報告したい。

漢詩研修

千代田岳精会　平井茂行

晁卿衡を哭す

李白

日本の晁卿帝都を辞し
明月帰らず碧海に沈み
征帆一片蓬壺を遶る
白雲愁色蒼梧に満つ

【解説】阿倍仲麻呂、中国名・晁衡（朝衡）の名前を聞く時、歴史に興味を持つ日本人なら誇らしい気持ちになり、同時にロマンを感じるのではないでしょうか。日本人ながら、唐の役人、文人として大いに活躍していた阿倍仲麻呂が三十六年ぶり帰国しようとしたが、暴風雨に遭い、安南（ベトナム）に漂着した。親交のあった李白はてっきり遭難により落命したと思い、その悲痛な思いからこの詩が作られた。現存する李白の詩の中に、人の詩を哭する詩は非常に少なく、数首しかない。送別は詩の主要なテーマだったから、李白にも別離を詠う詩は多いが、別離の場合は、また会う可能性がある。将来のその機会を考慮しながら、目前の別れに際して丁寧な詩を作ることもあったと思われる。その点で友人の死を悼む詩は、将来の利害などとは全く関係なく作られる。まさに詩人の哀惜の表現にほかならない。李白が仲麻呂と交流したのは、長安に滞在した七四二年～七四四年の二年たらずの期間のこと。李白が長安を追われて約十年後、仲麻呂の悲報に接して詩を作るぐらいだから、仲麻呂を非常に敬愛し、相当に親しい友人だったに違いない。仲麻呂が遭難した知らせは李白の耳に届いたが、南方に漂着して救助され、のちにまた唐朝に仕えたことを、李白が知ったかどうか、さだかではない。また、詩頭にある「日本」の国号は唐代以降に用いられだした語で、それまで「倭国」と呼ばれていた。この詩は仲麻呂が出航した

七五三年（天宝十二年）か、翌年の早い時期の作品である。仲麻呂が帰国の際、送別の宴が開かれ、李白と同じく親交のあった王維は「秘書晁監の日本國に還るを送る」という送別の詩を贈った。文人としても優れていた仲麻呂は異国にあって、親を思い、国を思う気持ちを率直に詠んだ好詩も残している。やはり我々に、とてもなじみ深いのは明州（浙江省寧波）から帰国の船出をした際に詠んだといわれている「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」という和歌である。

【語釈】 ＊晁卿衡…晁衡は人名。阿倍仲麻呂の中国名。朝衡とも書く。「卿」は官名。仲麻呂が七五三年に中国から帰国する際、秘書監兼衛尉卿（軍器　儀仗等を掌る役所の長官）であったことから、こう詠んだ。また友人に対する親愛の呼称として「晁卿」と呼んだ、とも考えられる。

＊哭……人の死を悲しみ大声をあげてなくこと。「哭」は声をあげ、「泣」は涙を流すことを表わす。

＊帝都…唐の都、長安のこと。

＊征帆…旅行く船。

＊蓬壺…東方の海上にあると信じられていた仙人の住む島、蓬來山のこと（ここでは日本のこ

と）。

＊明月……清らかな月（ここでは仲麻呂をさす）。

＊愁色……うれい悲しむ。

＊蒼梧……伝説上の帝王　舜が巡幸して没したとされる湖南省南部の九疑山のこと。もう一説は、中国東海（東シナ海）にある伝説の山、郁州山の別称ともいう。

【通釈】日本の晁卿は帝都　長安に別れを告げ、一艘の帆かけ船に乗って遠く東方海上にある蓬来の島、日本を目指して去っていった。しかしながら、明月のように輝かしかった君は、祖国に帰りつけないまま碧い海に沈み帰らぬ人となってしまった。悲しみの気はいを含んだ白雲が、沈んだ蒼梧の海の空に立ちこめている。

三輪山（3）　登拝

夏目勝弘

登拝口の前で下山して來る人の流れが切れたので登り始める。第一歩より急な階段がつづく、階段といっても丸太を横にした足が半足分しか掛らない、それも前日までの雨で、ぬかるみスベル。爪先に力を入れないと登れない、そして尾根道がしばらく続く、体力が戻った気がする。

水呑谷という小さな流れに丸太の橋が掛けてある。橋といっても丸太を無造作に並べてあるのみ隙間が多い、一歩二歩で渡る。

平坦な所を少し行くと、岩を階とした一段を上がりまた丸太の階段が続く。

ようやく休舎に着く、三光の滝といっても山水を樋で引き落している滝で頭を冷やす、

休んでもおられず御神水で水分補給、たちまち急な岨道、浮石、落石注意とある。

杉・桧・椎の木々で太陽が射し込まないため道は、ぬかるみスベッタ跡が所どころある。

太陽が射し込まないほど密集している杉・桧・椎の樹齢は百年以下の太さが多い。

標高三六〇メートルの中津磐座では幹回り三メートル余の杉が数本残っていた。

参道は杉の根が表面に露出してというより根が絡み合い、網目状に参道を被っているため、注意して登らなくてはならず疲れる。

幹回り三メートル余りの杉の傾木があり、直根がなく、太い根が水平に二メートル余り伸びているのみ、山肌に添ってしか伸びれないため、三輪山には大木が残れないのだろう。

磐座のイメージは巨岩がデント座っていると思ってきた。一トンあまりの岩もあるが、二、三百キロ余りの岩が二十メートル四方に無造作に聚合し、注連を張りめぐらしてある。

中津磐座を過ぎまた急坂の階段が続く、少し平坦の参道を進む、ここは特にぬかるんでいる。

この参道のあたりにはカラスサンショウの林があり、初めて現物を見た。

樹高は三メートル余はあり、太い物では、幹回り、五十センチはあるであろう。幹をビッシリ五ミリほどの黒い棘で被われている。特に枝梢には棘が多く付いている。

花は夏淡緑の細い花を付けるが、今は辛味のある果実が付き初めるころ。

ここより参道は、ぬかるみ深し浮き石の要注意、階段も、岩・根等を利用した所が多く続き難渋する。

歩速も遅々として進まず、そして階段のない参道をしばらく行く、標高四四七メートルの高宮神社に到着、その裏に奥津磐座が見える。

とりあえず道があるので進んでゆくと、立入禁止とある、中津磐座より小さく、デントした神々しく拝し引き返す。

高宮神社のある所は、古代の神の峰で日向社があった。春分秋分の日は祈りの場所。

持ってきた磁石で真東と真西を確かめ、真東の伊勢神宮の天照大神に一礼、真西の淡路島の伊勢の森のスサノウノミコトに、一礼し早ばやと下山した。

下りは急ぐことが出来ず、一段一段両足を揃えて下りるも、二度スベリ尻餅をつく。

三光の滝にて、汗で重くなったTシャツを洗ひ、強く硬く絞り、少し軽やかに下山した。

社務所の横の靴の洗場の順を待ち、泥にまみれたスニーカを洗ひ、巫女にTシャツを売っていないかと聞く、そっけなく無いと。

三万歩プラス、ぬかるむ急階段の参道、駅まで十分余り、でもタクシーと待つも来ず、しかたなく、足をひきずり三輪駅に着いた。

「氷魚」のことから（192）

岡本八千代

庭の草々の中にフジバカマが咲いていた。その一花を折って、小さなうす緑色のコップに入れておいた。いったん萎れていたが、元気をとりもどし、その一花か楚々としてよみがえってきた。——。実に清らかな白い地味な花、その環境で子規と漱石のことを書く。

子規の「七草集」の「蘭」の巻の「蘭」はフジバカマの巻であった。……。

漱石ブームの今、やはり子規との友情をみつめてみたい。「七草集」から「木屑録」へとつながってゆく二人の間柄の仲良くなってゆくプロセスに、彼らはひんぱんに手紙のやりとりをしたのであった。

○「昔の青年は、しょっちゅうかおをあわせていても、またそれとは別に、よく手紙のやりとりをしたのである。それは、まじめと諧謔とからめて、せのびをきそいあうゲームのようなものであった。」

○「手紙を書くことによって、自分の考えにかたちをあたえ、それをみずから点検し、またお互いに点検しあったのである。したがってその相手は、『はなせるやつ』でなければならなかった。」

と言っている。（「漱石の夏やすみ」の著者高島俊男氏のことば。以下参考にしてゆく）

○子規は明治22年5月9日に喀血して病臥した。6月から7月はじめにかけて学年試験は受けたらしい。7月2日に試験が終わると、翌日東京をたって帰郷し、以後9月24日まで郷里にあって療養した。

○明治22年7月1日に東海道線が開通したので、子規に友人ひとりがつきそって、静岡で一泊、岐阜で一泊、神戸から船で松山へ帰ったのであった。

○一方、漱石の手紙は、常に子規の病気にふれて心配していたらしい。

○漱石の手紙「炎暑之候病体如何被爲渡候哉日夕案じ暮し居候とは些と古めかしくかたくるしき文句ながら……」冒頭から「日夕案じ暮し居候」まではふつうの病中見舞の文言。そのあとの、「とは些と古めかしく」が、「ナーンチャッテ」にあたるらしい。以下ガラリと調子がかわって諧謔的文章になる。

○「……文句ながら近頃の熱さでは無病息災のやからですら胃病か脳病、脚気、腹下シ抔種々な二豎先生の末臨を辱うする折柄なれば貴殿の如き残柳衰蒲も宜しくという優にやさしき殿御は必ず療養専一攝生大事と勉強して女の子の泣かぬ様餘計なお世話ながら願上候」—これで〃心配しているよ、大事にしてくれたまえ〃の気持ちが伝わるのである。—と。

○「二豎先生」＝病気と勉強するはつとめ。「辱うする」＝かたじけなくする。

その他、子規は学年試験の時、体操の試験が受けられず、その点数のことが心配になって漱石に尽力を依頼した時のこと。

（次回へ）

ことのはスケッチ（456）

今泉由利

「明星」③

子規子来書
「明星第六号の御書拝見致候、これに対して御答申上度存候へど書面にては意を墨さず、人づてには愈々真を誤らんと恐る成るべく御面会の機を得て申上度候、
一言申上置候は、貴兄が小生に対する攻撃は「雅推」と「誤報を信ぜらる」との二事より起り候相見え候　正岡常規
九月十六日
与謝野寛　殿

明治三十三年十一月　明星八号

素蟻　中濱糸子（東京）

○それといはば一人の乳母のまた泣かむ父とはいはじ母とはいはじ
○たまはるなやらむといひしおなじ夜の月の夜ごろを独り泣くかな
○わが歌にほぎまつらむはあなかしこ小松にそへむくれないの扇
○せに泣きし君は知らんに問はであれな人こふる胸うたおむふ胸
○紅筆をふたつに折りておくらばや花の袂なきわれ
○やさし御名ただによばんはへだてありおなじ色なる白百合の君
（とみこの君へ）
○ほろ筆にうつしたまへなやさし御名身にしお御名の白萩の君
（晶子の君へ）
○人にいふ恋とは夫に似たるかとつめたき石に頬をふれて見し
○池殿に人のほの見てなにとなく藤さく巌の右にかくれぬ

山川とみ子（京都）

○日を経なばいかにかならんこの思ひたまひし草も今蕾なり
○恋せじと書かせたふかな琴にして共に植ゑし桐のおち葉に
○恋として世にのこさばや立ち濡れし松の木蔭の合傘の君
○いてふ葉にうすく紅の香のこりなばろれにたまへなみなさけの歌
（いと子の君に返し）

鳳晶子（和泉）

○師の君の目を痛みませる庵の庭へうつしまゐらす白菊の花
○きのふをば千とせの前の世とも思ひ御手なほ肩にありとも思ふ
○前髪のみだれし額をまかせたるその夜の御胸あゝ熱かりし

与謝野鉄幹

○恋と名といづれおもきをまよひ初めぬわが年こゝに二十八の秋
○君が名をわが名にふみにとゞめおきてやまとの恋に命さづけむ

○秋かぜにふさわしき名をまゐらせむそゞろ心の乱れ髪の君
○君によりてこの秋知りぬ菊さむく柳つめたきうらぶれ心
○その人にたかきおもひはさづけながらうつくしき手よ触れも見ざりし
○わが歌か悪しと云ふ人世にあるにあしたうれしき夕さびしき
○京の宿に御手放ちしをまどふなり恋のわかれか歌の別れか

明治三十四年一月　明星十号

吹雪　中濱糸子（しろふじ）

○いくたびか染めし薄葉やりすててためいきふかく空あふぐ夕
○けふよりは泣かじ歌わじわらはじとまづ筆とりぬ一月一日
○追羽根のむれにそむきて壁により手毬かろぐる前髪の君
○強ひませし屠蘇に染めたる頬をなでぬみださじとする髪のひとすぢ
○むつかしき人のとがめを胸に泣きさらばよ歌はすてんと笑みし
○しら藤ともるるはつらきやさ名なりひろき御袖をかしませな君
○京の春にうかるる人のるすとひてさびしくなりぬしら梅の花
○花の露にゐひふく蝶のしろき羽をうちてもみたき袖の色かな
○すくせぞと思ふに堪へで泣く涙つめたきものとこの年知りぬ
○人のよをそむきて出でしふたりなり泣きて狂ひて泣かむ
○よわき〳〵われを都にひとり泣かせただにおはすか西の京の春
○歌よまじ筆はとらじとちかひしもすねてそむきぬ花の下かげ

鳳晶子

○人とわれおなじ十九のおもかげをうつせし水よ石津川のながれ
○春みじかし何に不滅のいのちぞとちからある乳を手にさぐらせぬ

明治三十四年二月　明星十一号

中濱いと子

○世をすてて人と泣かんと我身にはきぬの染色濃きに過ぐるよ
○何となく人むつかしき恨ありあまきゐんぼを夕みせ給へ

山川とみ子

○たてかけし琴の緒ひくくひびきけり御袖のはしもふれじと思ふに
○きぬでまり真白きなりに春のきてかがる色糸みなもつれたり
○ちる花の土のかをりをなつかしみ小褄はらひて梅の根に寄る

明治時代の、美しも激しく、直向きな和歌に出会えました。
これからの私の心に、ずっと居て下さいます。

編集室だより【二〇一六年十一月】

○二〇一七年、新年号の編集が終りました。二月号を目指し、続けてゆきます。過去も現在も未来も、三河アララギの皆様と共におります。

○劇団こむし・こむさ　第3回公演「啄木の蒼き影法師」。作・演出・野村勇。ｄ倉庫にて、私自身も参加しているように近くで演じられるのでした。

「はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざり」。詩人から歌人へ…そして小説家へと脱皮を繰り返した「石川啄木」。根本から彼を知ってゆく気持でした。

○甥の結婚式で長崎に行ったことがありました。その時いただいた「桃カステラ」の美味しかったこと！「どうしたらまたいただけるのだろうか」といつもいつも思っていて、思いついてネットで調べると、カステラを一番はじめに造ったという老舗から、宅急便でとどきました。友達をお呼びして、一緒にいただいたのでした。

○箱根、岡田美術館「若冲と蕪村・江戸時代の画家たち」。3列シートのバスでゆくツアーです。

あまり人影のない居心地の良い館内。自身のペースで歩いていると、歌麿「深川の雪」がありました。予期してなくて驚く。若冲「孔雀鳳凰図」、蕪村、応挙、蘆雪、大雅…なんという贅沢な美術館でしょう。いつまでもここに居たかった。次の三島スカイウォークという、富士山に添った長い長い吊り橋。これはこれは、また素晴しい経験と思いのうちに、忍野八海へゆき、河口湖のもみじ回廊にも行き…良い風景が沢山沢山ありました。

○日本の文字のルーツ、漢字のことに興味がでてきたなーと思う時、東京富士美術館において、「漢字三千年」漢字の歴史と美。八王子へゆく。最古の漢字といわれる甲骨文字、文字の統一を果たした秦時代の漢字、文字の刻まれた兵馬俑、漢字を芸術にした王義之。酒儀式の器…。そんな遠い中国の漢字が、今の日本の漢字になっていることをよくよく知る。

○雑司が谷周辺、鬼子母神へ吟行。

ここで思い出してしまうのは、高山福子母に連れられ、ジョン万次郎のお墓、染井霊園の貫名のお墓へお参りする行事があったこと。大切なことをしていたのだ、と今になって思う。鬼子母神堂では、雄木のイチョウ、雌木のイチョウ。境内は銀杏の匂いに満ちる。しっかり柘榴も実っていた。

○府中美術館へ「藤田嗣治展」。生涯と作品。「藤田嗣治」の作品に出逢える機会は逃さない。そして、ちょっとななめから、黙って立っている。

日本の美術の秋に便乗して、沢山に出逢えた。素晴しい時を過すことが出来た。さあ自分に戻ろう。

野菜の花（7）

鈴　木　孝　雄

○ シュンギク

外側が白く、内側が黄色な一重の舌状花は何かに似ていませんか?マーガレット等のヒナギク（デイジー）を思い起こす花。春菊は英語ではCrown daisyと言うように、園芸用の菊の仲間ではなくデイジーの仲間です。

日本を始め東アジアでは、春菊は葉を食すため、花は咲かさないように蕾のうちに摘んでしまうので、花はあまり目にかからない。しかし、うっかり摘蕾を忘れてしまうと、写真のような綺麗な黄色と白、または黄色一色、あるいは紫の花を早春に咲かせる。西欧ではもっぱら花の観賞用に栽培される。宜なるかなである。

原産地は地中海沿岸地帯とされている。葉菜利用は中国で始まったので、中国原産との説もある。日本に渡来したのは室町時代の頃とみられ、江戸時代以降は色々な地方名で主に西日本で栽培された。鍋料理の普及とともに戦後は生産量が増え、今では年中販売されている。

βカロテンの含有は野菜の中でもトップクラス。葉酸、ビタミンC・E・Kも多い。カルシウム、鉄、マグネシウムなどのミネラルも豊富で、大変栄養価の高い野菜。春菊の旬は、11月から3月のちょうど鍋の季節で、香りと微かに苦い味が楽しめる。

春菊栽培は比較的容易。種の発芽率は高くないので、どうしても余分に種を蒔いてしまう。時宜間引きが欠かせないが、今まで順調に育った苗を抜くのは忍びない。主な害虫は、アブラムシと地中に潜むネキリムシ。無農薬栽培では、毎日の観察と害虫捕殺が肝要。

次回は、ジャガイモの花の予定です。

お知らせ

△二月号の原稿は、十二月三十日（金）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月の原稿に返却希望とお書き下さい。三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一一四－〇〇二二　今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇－六－五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一一四－〇〇二二
東京都北区王子本町一－二六－六A
TEL・（〇三）五九二四－二〇六五

◇URL・E-mail yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
Homepage http://imaizumiyuri.jp/

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社　桜創美